

なって僕の子供が生まれるっていう時に、女の子の名前はまだ考えていなかったの、「ゆきこさんにあやかるように『由紀子』にしよう」ということにしちゃったんです。もちろん、一方的な措置でご本人には何の連絡もさしあげなかったと思いますが。

ゆき 本当に感激しました。春兆さんからの年賀状に、ある年に「命名 由紀子」とあって、本当にうれしかったです。

春兆 その娘がもう結婚しましたから、僕が最初にゆきこさんにお会いした時よりも、娘の方が大きくなってしまいました。

ゆき お嬢さまは今、何歳でいらっしゃいますか。

春兆 25歳かな、26歳かな。

ゆき 一度、お会いしましたけれど、とてもすてきなお嬢さん！

奥様との大恋愛のきっかけとなった俳句について話してくださいませんか。

春兆 実は、この新聞記事が出る少し前から彼女が僕の周囲に現れていました。

ゆき 奥様の方が私より早く春兆さんにお会いになってたんですね。

春兆 で、それらしい俳句をちらちらと作っていたものだから、あなたが取材に来たら、俳句仲間が勘違いしちゃったんです（笑）。みんなに詰め寄られた時には、そんな素敵な彼女ならいいなあ、とごまかすのに大変だったんですよ（笑）。

ゆき 私の存じあげている奥様の俳句は、春兆さんのご著書『折れたクレヨン』（ぶどう社）で拝見した句で、虹色のショールを題材にした句です。

虹色に ショール編み上げ 眠られず

と、作られた。それを受けて春兆さんが、

たたみても 波うつショール 逢いえし夜

と詠まれています。

この他にもいい句をお作りになっていそうですね、ちらちらと（笑）。

春兆 決定的になったのは、僕の

透明の杖欲し かげろう中 歩まん

の句に、彼女が

かげろうに 踏み入り 透明の杖とならん

と応じてくれたことでしょうね。

いやあ、この辺で勘弁してくださいよ（笑）。

◆足とおアシ

ゆき 「春兆さんが俳句の賞をもらわれた」というニュースを私が書くきっかけを作ってくださったのは、原田豊治さんとおっしゃる障害者雇用の草分けの方でした。原田さんは、「これから会う春兆さんは、一見、酔っぱらっているように見えるけれど、それは脳性マヒという障害のためで、この障害は、そもそも…」と事前にオリエンテーションをしてくださいました。

脳性マヒの方に会ったのはその時が初めてだったのですが、おかげで春兆さんが酔っぱらっておられるのではないことが最初からわかりました（笑）。でも、その後、家にお電話をいただくようになると家のものから、「酔っぱらいからの電話だけど切っちゃおうか？」とよく言われました（笑）。

これが最初の出会いです。

春兆 今でも夜はたいてい酔っぱらいにされちゃう。お宅だけじゃないですよ。ひどい時は「なにを昼間っから酔っぱらっているんだ」って怒鳴られてガチャン。慣らされちゃいますよ。

それはそれとして、当時は僕みたいなのが結婚すると、結構それだけでニュースになってしまうんですね。ところがウチのが「そういうのいやだ」と言ったので、一切内緒で結婚式をしたんです。ですから、ゆきこさんにも結婚してからご挨拶状を差し上げた形になりました。

今じゃこの手の話はその辺にごろごろするほどあって、とてもニュースになんかなりっこないけれど。

ゆき 社会面トップになったこの記事も、とても大げさな見出しを掲げていました。

『精進、宿命を乗り越える みとご俳人協会賞』

大時代的な見出しでしょ。

でも、そんな時代でも、春兆さんはユーモア精神をたっぷりお持ちでした。「次は、何が欲しいですか」とうかがったら、「足とおアシがほしい」（笑）とおっしゃった。おまけに、「俳人協会賞のハイは僕の場合、"やまいだれ"の廃です

から」って、新聞記者になってわずか40日目の新米に向かって、そんなこと言うんですよ（笑）。

さすがに「やまいだれ」の方はあまりにもブラックユーモア的なので、新聞には載せられませんでした。「足とおアシ」の方は記事にさせていただきましたけれど…。

春兆 そうね。よっぽどうれしかったんだらうね。俳句の記事で普通ならそんなにしゃべることないはずなのに、そんな駄洒落を飛ばしたんだから、よっぽどうれしかったんだと思うよ。しかも、（眼鏡がズレ落ちそうになりながら）取材者がいいじゃない。

ゆき 取り柄は、若かったということと、初々しかったということぐらいじゃないかしら。

春兆 いやー、（眼鏡をもとに戻して）今もお変わりないですよ。

ゆき 春兆さんは女性に対してイタリア男性並みのサービス精神をお持ちです。日本には珍しいタイプでいらっしゃいます。あれから4分の1世紀以上経っていて、変わらなかったらおばけですもの（笑）。

春兆 僕も人から「変わらないですね」といわれることがあるんだけど、僕の場合は「変わりようがないよ」って言うんです。

ゆき 本当、還暦を過ぎられたなんて信じられない。還暦と春兆さんのイメージが全然結びつかないわ。

春兆 若く見るとしたら、きっと好奇心のせいですよ、お互いに。

◆新聞記者の財産

春兆 それにしても、今の若い新聞記者は、長く付き合うということを煩わしく感じているみたいなところがあるように思うのですが、いかがでしょうか。部署が変わったから、とか、取材は終わったからもう連絡してくれるな、みたいな。

ゆき うーん。私も若い人の事はわからないけれど、私自身が取材で知りあった方と長くお付き合いをするようになったきっかけはあったように思います。

私、春兆さんとお会いしてから20日後に、東京・中野にあった社会部西部支局に配属になりました。その初日、支局長さんが革表紙の手のひらに入るくらいの住所録をくださって、こうおっしゃいました。「これから君がここに書いていく名前と住所が、君の財産だよ」って。お目にかかった一人ひとりを大事にすることを教えられました。

年賀状もそういう意味では財産です。年賀状は今ではとうとう、1500人位になってしまいました。

春兆 その年賀状が凝っているんだな。(編集長に向かって) すごく面白いの！
ダンナさんが、オペラ歌手を狙っていることだとか、アル中に化けて精神病院に潜入したことだとか書いてあって、すごく面白い！

ゆき 我が家の出来事のエッセンスをご報告しています。独身から二人になって、子どもができて賑やかになって、亭主が年一回、お客さまを呼んでオペラ公演をするようになったこととか…。

娘の瑠璃の名前をひっくり返したリルという猫がいた当時は、年賀状にもそ



大熊由紀子さん（愛用の手帳を手に）

の4人の名前を並記していました。

春兆 あー、そうそう。

ゆき ところがある日、その猫が死んでしまったんです。「喪中」とも書けないので、翌年の年賀状からリルという名前をスッと消したら、ずいぶんたくさんの方から「猫ちゃんはどうしましたか」と聞かれました。おっちょこちょいの方は、ルリとリルを双子と勘違いされて、「もう一人のお嬢さんはどうなさいましたか？」と聞いてこられました。白猫という肩書をちゃんと書いていたんですけど(笑)。

春兆さんの年賀状も全部とってありますよ。お一人ずつファイルしてるんです。花田家も一家の変遷が楽しみです。息子さんの「政孝さん」もお父様である春兆さんの本名・政国さんから一字とられていますね。

春兆 ゆきこさんとは年賀状のやりとりがずっとありましたから、何年もお会

いしなくても、ブランクを感じないですむんですよね。今の人は年賀状どころじゃない人が多い。

ゆき 人こそ財産である、と教えてくれた私の先生・竹内宏支局長のような方が、今の支局長の中に少ないのかもしれませんがね。

私が竹内さんからいただいた手帳はボロボロになってしましまして、今はもっと厚い手帳にまとめています。でも、これも一杯になってきました。この中には、昔知り合った区議さんやさまざまな患者会の皆さん、医療、福祉、科学、技術の専門家、行政官、嫌煙権運動をされている方たちの連絡先もあります。知り合いが増えるほど、「記事にしてほしい」「相談にのって」と連絡をいただくことが多くなります。受話器をおいた途端、次の電話がかかってきて何にもできない日もあります。

若い人はもっと割り切って仕事をしているのか、聞いてみたことがありませんからわかりませんが、若者の気質が変わったのでしょうか？ 春兆さんお知り合いの若い方もそうですか？

春兆 そこいらはわかりませんね。

こっちの対応も昔ほど執着しなくなったせいでもあると思いますが…。

ゆき 春兆さんが出会った記者の中で、私は何番目でしょうか。

春兆 2人目です。

1人目が仙名さん。『週刊朝日』の副編集長くらいまでいかれた方ですよ。

ゆき 英語の達人でもあられます。2番目だから私のこともひいきにしてくださったのかしら。この頃は春兆さんのところにマスコミの人がウンカのごとく来られるから、多少、粗末にしていらっしゃるのではないのでしょうか。

春兆 いやー、それほどジャーナリスティックじゃないですよ、僕は。

◆男の仕事？

春兆 そうすると社会部におられたのは案外短かったんですね。

ゆき ええ、もともとは科学ジャーナリストになろうと思って、朝日新聞を受けたんです。でも、朝日新聞は、女の新聞記者なんて要らなかったみたい。ただ、その頃ちょうど東京オリンピックを控えていました。オリンピックのニュースの宝庫は女子選手村。ところは、ここは男子禁制、女しか入れないきまりです。女の記者がいないと他紙との競争に負けてしまうと、どこの新聞社も、この年、急に女性を採りました。私が受けたのは、その時期だったんです。二年先輩には松井やよりさんがいました。

春兆 僕も存じてます。ある意味ではゆきこさんと対照的な方ですね。

ゆき 松井さんは英語、フランス語が堪能でロシア語も習っていらして、後には中国語もペラペラになられました。女性の先輩は皆、英語はものすごく上手で、たまたまドイツ語が抜けていたんです。私、ドイツ語で受けたので採用してもらえたのではないかしら。(笑)

現金なもので、オリンピックが終わった、つまり、私の入った次の年からは6年間も女性の記者は採用されませんでした。当時は「新聞記者は男の仕事である。ただし主婦連を回ったり、料理記事を家庭欄に書くのは男の仕事じゃない。だから女の記者も少しは必要だ」というようなことが、あからさまに言われていました。

春兆さんの記事の『精進、宿命を乗り越える』という見出しは、女の記者にも当てはまるんです。

私たちは「女は、やっぱりだめだね」と言われたら大変だ、後輩を採ってもらえなくなる、という恐怖感にいつもさらされながら働いていました。

オリンピックが一段落し、科学部に移りました。

◆おみやげ話

ゆき 科学部では初め医学や医療について書いていました。子どものころは看護婦さんになりたいと思っていたんです。

春兆 それでドイツ語をやられたんですか。

ゆき ドイツ語をやったきっかけは単純で、英語ができなかったからです(笑)。それともう一つ、ドイツリートが好きだったというのもあるかも知れません。

春兆 なるほど。それで大熊一夫さんが出てくるんですね。その頃、他の新聞社に僕の親しい記者がいて、斎藤さん(ゆきこさんの旧姓)を誰が射止めるか、なんていう噂をちらちら聞いていました。彼も狙っていた一人でしたからね(笑)。

ゆき 本当ですか？ これはいいお土産話になります。

春兆 今だから時効だけれど、当時、ががっかりしていましたよ。

ゆき せめてお名前だけでも…(笑)。

春兆 それはちょっと、ニュースソースは明かせませんね(笑)。

◆科学ジャーナリストの仕事

ゆき 医学の分野を書いているうちに、治療の最新情報を新聞で知らせることは多くの人々の役に立つ、という手応えを感じるようになりました。

新聞の医学ニュースというと、とかく「動物実験でがんが治った」といった類の怪しい記事が多くて、世を惑わしますが、一方では、かなりいい治療法なのに、お医者さんにも知られていないことがあります。その結果、治る病気も治らない。それをどう見つけだし、どう分かりやすく伝えるか。

春兆 情報の氾濫の中で、常にかすかな声にでも耳を傾け、その中に埋もれそうになった、でも何か真実を伝えていると思える情報をいち早く、広く伝えていく、これこそがマスメディアの本来の使命かもしれませんね。

ゆき かすかな声を聞き取ろうとして、私が突き当たったのが医療制度です。たとえば、歯科医療の現場では、「健保ではろくな入れ歯が出来ませんよ」と言って差額料金を取ることが広く行われています。でも、「医療がポロ儲けをしている」と非難するだけでは解決になりません。元を辿れば、健保の入れ歯の報酬が安く抑えられている。その背景を調べ、歯科医療制度の問題点として記事にしました。いまから25年ほど前のことですけど。

春兆 1つの記事にするのにも、何倍もの取材が必要になる訳ですね。

ゆき そうなんです。ですから、自然に守備範囲が広がっていきました。自然科学としての「医学」から社会とのつながりの中での「医療」へと関心が移ってきたように思います。

春兆 大学での専攻は何でしたか。

ゆき 科学史と科学哲学です。

春兆 ゆきこさんの視野が広いのはその影響かな。

ゆき 科学の歴史の中では、間違っただけの仮説が横行したり、データのでっちあげもあります。それを何十年何百年か経って評価するのが科学史という学問ですが、それに対して「今、起こっているその真最中にそれを評価する」のが科学ジャーナリストの仕事だと私は思っています。

何年か経って、どれが間違いか分かってしまってから評価することに比べ、今、目の前で起きていることを評価することは難しいし、度胸がいります。

この頃は私、さらに誇大妄想になってきて、科学技術批判の嵐の中、科学の有意義な側面を發揮させるためにも科学ジャーナリズムがあるのではないか、と思うようになりました。

春兆 触媒の役目ですね。

ゆき ええ。それともう一つ、学術雑誌や権威ある機関の調査に頼らないで記事を書こうというのが、私の課題というか志みたいなものとしてありました。たとえば、日赤産院で、目が見えなくて、少しもうろくもされている院長さんがメスをふるっているらしい。でも、そのことは学術雑誌にはもちろん書いて

ないですし警察も調べない。そこで2か月も3か月もかかって被害者を探して被害の事実を確認する一方、周りのお医者さんにも裏を取りました。表立って証言してくれるお医者さんはいないので、こっそりと確かめなくてはならず、記事にするのは本当に大変でした。

上司はもすごく躊躇していました。最後は『週刊朝日』に材料を提供し、「『週刊朝日』は次の号でこの記事を出しますよ。せっかくこちらが調べたのにいいのですか」とオドシて、やっと日の目を見たんです。25年前のことです。

春兆 体当たりですね、ご夫婦そろって（笑）。

ゆき 大熊一夫の場合は『ルポ・精神病棟』『ルポ・老人病棟』（いずれも朝日新聞社刊）で文字通り我が身を危険に晒して描きました。

いずれも札付きの病院ではなく、平均的な病院です。それが、ひどい人権無視をしているのですから。

保健所の監査は、前もって連絡が入りますから病院側も取り繕います。夕方6時から朝12時までベッドに4分の1のお年寄りが縛られていること、うすうすは知っているもお役人は見て見ぬふりをする。

そういう所をジャーナリスト的な直感を頼りに体当たりしていくわけですから因果な商売です。名誉棄損で訴えられたときのことを考えて、公には言えないような方法でカルテをコピーをして、いつでも訴えて来いという態勢をとってから、「これは特別ではなく日本のどこでも行われている」と実名をあげて連載記事にしました。

◆つかい棒

春兆 体当たりでの取材というのが、最近では少なくなりましたね。近頃はどんな小さな記事であっても、「〇〇省の発表によると」というような書き出しによる記事が目につきます。

これはひとつの後ろ楯、つかい棒と言えるかもしれませんが、何かの後ろ楯がないと個人では記事が書きづらいのでしょうか。自分の責任で書かないのか、自分では調べないのか、っていう気になっちゃう。実名を挙げる場合のトラブルを気にするんでしょうね。

それとゆきこさんがおっしゃられた学術誌というのも一種のつかい棒ですね。僕はそういうつかい棒のお世話にならない代わりに、僕のところにはそういう専門誌からは依頼が来ませんね。もっとも論文みたいに系統立てて書くことは苦手なので、依頼が来ても書けるかどうかはわかりませんが…。

ゆき 専門誌って、いい文章とか感動的な文章、分かりやすい文章は載せない

ことにしているみたいです（笑）。

春兆 でも、ゆきこさんの場合は、朝日新聞がつっかい棒になっていますよね。朝日新聞といえは、この頃は少し世間から落とされた感もありますが、一種の権威であることに違いありません。

ゆき 学会や省庁の後ろ楯なく書いていますから、これで朝日のつっかい棒もなかったら大変。大熊一夫は自由に取材に打ち込みたくて朝日を辞めましたが、私は朝日のつっかい棒があった方が世のため人のために少しはお役にたてると思うものですから定年まで居ようと決心をしています。

女であることのハンディキャップが「朝日新聞というつっかい棒」でゼロになるという側面があります。春兆さんは電動車イスという補助器具を使って歩いておられるわけですが、私にとっての補助器具は朝日新聞。

春兆 でも見方によっては、ゆきこさんのような方が体当たりでやっているからこそ、朝日は朝日としてのつっかい棒たりえているのかもしれませんがよ。朝日の記者がみんな「～省の発表によると」的な記事を書くようになったら、朝日の威光自体があやうくなるのではないのでしょうか。

僕らは今まで朝日の威光を借りてきました。朝日に記事になるように持ち込んだり、朝日の論説ではこう言っている、と借りちゃうんです。同人誌『しのめ』が朝日で大きく取り上げられると、それがよくつっかい棒の役目をしてくれました。

◆「場」を活かす

ゆき つっかい棒といえは、福祉施設が障害をもつ人々のつっかい棒になっていた時代があったかと思います。春兆さんも「毎年1000人に1人は僕のような赤ちゃんが生まれる。せめて重症者を半永久的に保護収容し、その人なりの喜びを与えてくれるコロニーのようなものがあつたら」と俳人協会賞を受賞された時（昭和38年）の取材で希望を述べられていました。

施設は、今の春兆さんにとってどういう意味があるのでしょうか？

春兆 あのころは水上勉氏の『拝啓・池田総理大臣殿』が世論を沸かせた後で、コロニー運動が盛り上がっていましたからね。将来の不安を思うと、それしか無いという気持ちでしたから。でもやっぱり、隔離されるということには問題がありますね。

ゆき それに気づかれた？

春兆 ええ、でも隔離されていても、どうやって抜け道を見つけるか。そのことも大事じゃないかなとこの頃思い直しています。

ゆき 隔離されている場合でも抜け道がある、といいますと？

春兆 それは、入り込んだことがないからわかりませんけれどね。ただ外に出られないのなら外の人をどうやって中へ巻き込めるか、そこらをもっとやれないかな、ということを考えますね。

ゆき この夏、「絵本の里」の別名をもつ北海道の剣淵町を訪ねました。旭川から30キロの所にある人口が5千人ぐらいの小さな町です。この町で夜でもコピー機が使えてファックスも使える所は、知的障害をもつ人のための施設（西原学園）しかない。役場や学校のは夜は使えません。農家の人たちが夜に集まって相談するときは、その施設が一番便利なんです。しかも職員は、この町にはめったにいない大学出で新しい文化を持ち込んできてくれる。そんなわけで、施設が過疎の町をなんとか良くしようという人たちの溜まり場になっていきました。話し合いの中から、この町を生き生きした「絵本の里」にしようという企画へとふくらみました。絵本を1万5千冊、それに絵本の原画を保管する特別倉庫を作りました。絵本の里のブランドで低農薬の作物も売り出すことにもなった。春兆さんのおっしゃったように、施設の中に町が入ってきて、いろいろな人が出入りするようになりました。

そのうちに、「知恵遅れ」と呼ばれている人のすばらしさに、町の人々が気づくようになったのだそうです。肩書で人の価値を判断しないこの方たちに好かれるというのは大変なことなんです。施設で会議していると、誰かだけコーヒーをもってきてもらえることがある。それに選ばれることが、すごく光栄なことになるんですって（笑）。

横浜の「朋」は、重複の障害をもった青年が通う施設ですが、ここには、いろんな人が音楽を演奏しに來たり劇を上演しに來ます。それにあやかって地域の住民が文化の香りを共有できる。施設が、いつのまにか文化センターの役割を果たすようになっていっているんです。

春兆 文化活動と結びつけるかもしくは、リハビリみたいな簡単な医療を呼び込むか、どちらかだと思います。

ゆき でも、そのためには昔のコロニーのように遠くにあってはだめで、町の中になければ。剣淵の場合も町の中心からそう離れていません。

春兆 遠くへ持っていきからいけないんで、その土地そのものが悪いわけじゃない。その地域に住んでいる人にはそこでいいわけ。要はそれまで住んでいた地域が望ましいというわけ。

ゆき 東京育ちの知的ハンディを負った人々を東北や北海道に連れていくから人さらいみたいでよくないのよね。

◆時間のハンディキャップ

ゆき 私は最近、ハンディキャップに二種類あると思うようになりました。「空間的なハンディキャップ」と「時間的なハンディキャップ」。たとえば、筋ジストロフィーや頸髄損傷の人なら、学校の中の段差をなくし、エレベーターをつけて空間のハンディキャップをゼロに近づければ、かなりのことができます。身の回りのことを手伝ってくれる介助者がいれば、一般の学校で十分一緒にやれるでしょう。

でも、言語の障害をもっている人や知的な障害を持っている人はそう簡単ではない。ゆっくり待ってさしあげる必要があるけれど、学校の中にはある一定の速さで時間が流れています。みんなが、ゆっくりすればいいのですが、その余裕をついつい持てなくなってしまう。だから時間のハンディを負っている人は、普通の学校にただ一緒にするだけでは、おいてきぼりをくってしまう恐れがあります。

春兆 僕はよく言うんですが、「できる」か「できないか」で分けてしまうからいけないんで、同じにできるといってもスピードの問題がある。それを出来る出来ないで分けてしまうと、そこが欠落してしまう。逆に言うと、出来る、出来る本人が頑張ったとしても、一定の時間内に出来なければ、社会的には出来ないと評価されても仕方ないのが現状なんですね。

ゆき そうですね。「時間のハンディキャップ」というより「スピードのハンディキャップ」と言った方が分かりやすいですね。

春兆 だから障害者の判定なんかでも、できる・できないと答える際に、一定時間にやらなきゃいけないということを条件に入れなくてはいけないかどうかによって違ってきます。

ゆき そのお話、ひと事じゃありません。私、話すのが遅いんです。アタマの巡りも、のろのろしていて。アメリカ帰りの、パッと手をあげて発言する人の中に入って会議すると、日本語でも、どんどん話しが先に置いていかれてしまいます。まして、英語で会議をやっていたらお手上げで（笑）。

そういえば、手早く書き上げられるかどうかが新聞記者の「できる」「できない」の評価につながります。内容以前に、スピードのハードルを越えなければだめなんです。

昔の科学部は週に2回しか紙面がありませんでしたから、時間をかけていろいろな人のことを取材して自分で納得がいったから書くことができました。

春兆 でも、そうやって時間をかけるべきときには、じっくり時間をとる。ときによそ見をする。そのことが逆にいざというときに、一つの事柄が起こっている最中にそれを評価するという目を養ってくれるんじゃないかな。その一つの成果が、ゆきこさんの書かれた『「寝たきり老人」のいる国いない国一真の豊

かさへの挑戦』（ぶどう社）として結実されたのではないでしょうか。

◆「寝たきり老人」のいない国では

ゆき ありがとうございます。この7年間くらいは、『寝たきり老人』と呼ばれる人たちは、行政や政治や医療の貧しさから寝かせきりにされてきたお年寄りだ」と手を変え品を変えて、書いてきました。日本でなら「寝たきり老人」と呼ばれる身になる人がデンマークでは車イスにのって、お洒落をして外出も楽しんでいます。寝間着から着替えることがリハビリにもなりますし、人に会いたいという気持ちも湧き起こります。

そう書いても、最初は、「あっちの人はドライだから、寝たきりになる年寄りも適当に殺しているに違いない」と言われたり、「いい所だけを見せられて、オメデタイことに鵜呑みして報告しているのじゃないか。どこかに大量の寝たきり老人が隠されているに違いない」とか、いろいろ言われました。

春兆 僕なんかも本当は疑っていた一人かもね。でも、近頃では日本の特養老人ホームですら、リクライニングに括り付けられるような人でも、起こされて食事ルームに出て来ている。

実は僕、緊急一時保護とかショートステイの際、病院なんかでは車イスで動けずお手上げなんです。そこで特に区立の特養老人ホームで預かってもらっているんです。それでわりあいその辺のことを知っているんですよ。でも、僕なんかはうっかりすると逆に洋服のまま寝てしまうんで、マークされているんじゃないかな。

ゆき 春兆さんのような疑り深い方、現場の事情に詳しい方も含めて、いい加減なことはお伝え出来ませんので、私も老後のための貯金をおろしては何度も何度も外国へ出かけました。幸い、私の記事を怪しいと言っていた自称「あら捜しの名人」が、ご自分の目で確かめ納得されて、『デンマークに学ぶ豊かな老後』（朝日新聞社）という本を書かれました。一番疑り深い人が納得してくれて、ホッとしています（笑）。今では少しずつ世の中も動いて、国も「寝たきり老人ゼロ作戦」を始めましたし、各県にゼロ作戦推進本部ができました。

春兆 1985年の敬老の日の一面『座標』にゆきこさんが書かれた「寝たきり少ないわけ」が、発端なわけですね。

ゆき ええ。北欧では、春兆さんのおっしゃった「足とおアシ」があるからです。電動車イスという「足」、その足で歩き回れるバリアフリーの家や町、そういった環境も含めた「足」が整備されています。

でも、いくら電動車イスを持っていても、車イスに乗るたびに家族が持ち上げるのでは、大変です。北欧だとホームヘルパーさんが人口当たり日本の20倍位いて、その人達が来てくれます。日本の一部の人が言っているような「ボランティア」では出来ません。朝起こすべき時にちゃんと来てくれて、お手洗いの時も呼べば来てくれるというプロを用意するには「おアシ」が必要になります。おアシ、つまり税金を使うにはみんなの理解がなければなりません。という訳で、政治とか民主主義とか行政にまで関心が広がることになってしまいました。

◆脱・お役所仕事

春兆 最近、また新しい本をお出しになりました。

ゆき はい、今度の『ほんとうの長寿社会を求めて』（ぶどう社）という本は「市町村からの新しい波」という副題が付いています。日本名物の「お役所仕事」を市町村から変えていこう、ひっくりかえそうという手引書みたいな本です。登場するデンマークの福祉部長さんはこう言っています。「正しいことをするのが重要なではありません。やっていることが正しい。それが重要です。市民のニーズにあったものが一番正しいのであって、決められたことをやっているのが正しいではありません」。

産業界から転身した出雲の市長さんは「行政は最大のサービス産業。言われてからやる、こんなのはサービスのうちに入りません」と、この本の中で述べておられます。

春兆 今の日本というのは個別に対応することが悪いことみたいな感覚があります。そこがよくない。例えば介護の話でも、1日30分ずつ2回に分けて介護してほしい人もいれば、昼間2時間まとまってほしい人もいます。ところが今の日本だと画一的に決められてしまいます。ホームヘルパーは1日何時間と決めてしまうから動きがとれなくなってしまう。

ゆき ホームヘルパーさんの働き方が全然違うことに、北欧に行って気がつきました。ある人は、毎日、起きる時と夜ベッドに寝る時来てもらう。もっと重い人は夜中、寝返りもうたせてもらう。軽い人は2週間に一度、掃除に来てもらうといった臨機応変さがあります。

日本の場合は1週間に1度とか、低所得の人とかと決まっていました。

それでもだんだん世の中は変わってきていますので、最近是非難するだけなくて、お役所をほめる社説も書いています。「脱・お役所仕事に期待する」とい

う社説は、その一つです。厚生省の老人福祉計画課の中村秀一さんが出した「ホームヘルプ事業の手引き」のことです。この手引きによると、

- ・ 15分でも長時間でも、早朝、夜間でも休日でも必要に応じてホームヘルパーを派遣すべきである。
- ・ 回数や時間を制限しているところは早急に、改正をなささい。
- ・ 同居家族がいても派遣の優先順位を下げてはいけない。低所得層に限ることは認められない。
- ・ 緊急の場合はまず派遣し、手続きは後でも構わない。

ところがこの重大な政策転換が新聞には全く載りませんでした。仕方がないので社説にこの「ニュース」を書きました。

厚生省はこんな風に変わり始めたのですが、市町村のお役人の意識がもう一つ冴えません。「日本の文化はホームヘルパーになじまない」なんて…。それでいよいよ頭を切り換えていただかなくてはいけないな、と思って、『ほんとうの長寿社会を求めて』を出しました。

春兆 反響が楽しみですね。でも、ヘルパー、いわゆる他人に家の中に入ってもらいたくない、という感情はありますね、特に主婦は。だから、障害者本人との間にギャップが生まれちゃう。

区の身障センターで、入浴設備を単独ではだめだけれど、介助者がついてくれば使わせる所があるんです。こうした施設の設備とヘルパー制度とを、うまくドッキングさせて使えるようにすれば、両方が助かるんですがね。

お役所が頑張ったら、新聞でちらちらとホメてあげることも大切ではないでしょうか。

ゆき そう。ちらちらと（笑）。お役人ばなれしたお役人、お医者ばなれしたお医者さん、とっても元気な女性たち、いろんな人たちが各地でいろんな試みを始めています。老いても障害をもっても誇り高く安心して暮らせるようにという共通の目標をもって、上下の関係ではなく、持ち味を生かしながら横につながっていく。ネットワーク方式で。

春兆 ネットワーク。昔で言う『縁』ですよね。お互い、『ご縁』は大切にしていきましょう（笑）。